

「JENESYS2.0」

中国大学生訪日団第21陣

訪問日程 平成27年6月30日（火）～7月7日（火）

1 プログラム概要

中国日本友好協会が派遣した中国大学生訪日団第21陣計100名が、6月30日から7月7日までの7泊8日の日程で来日しました。（団長：王占起（オウ・センキ）中国日本友好協会政治交流部 部長）

本事業は「JENESYS2.0」の一環として行われ、東京都、秋田県を訪問し、日本の大学生や地域の市民との交流の場を通じて、友好交流と相互理解を深めたほか、日本人のコミュニケーションに関する講義や秋田県の民俗文化・芸能・観光についての講義を受講、また、政治・歴史・文化・社会等さまざまな視察、参観を通じ、クールジャパンに直接触れ、日本に対する包括的な理解を深めました。

2 日程

6月30日（火）

成田国際空港より入国

7月1日（水）

オリエンテーション、日本人のコミュニケーションに関する講義、
学習院大学訪問・交流、歓迎会

7月2日（木）

浅草見学、秋田県へ移動、入道崎見学、和風温泉旅館での日本文化体験

7月3日（金）

秋田県庁による講義、千秋公園見学、秋田大学訪問・交流

7月4日（土）

秋田県仙北市ホームビジット

7月5日（日）

田沢湖・角館武家屋敷見学、東京都へ移動

7月6日（月）

国会議事堂・有明清掃工場・商業施設視察、歓送報告会

7月7日（火）

羽田国際空港より帰国

3 写真

	
7月1日 根橋玲子明治大学情報コミュニケーション学部教授による講義（東京都）	7月1日 根橋玲子明治大学情報コミュニケーション学部教授による講義（東京都）
7月1日 明治大学情報传播学部 根橋玲子教授の讲座（東京都）	7月1日 明治大学情報传播学部 根橋玲子教授の讲座（東京都）
	
7月1日 学習院大学訪問・交流（東京都）	7月1日 歓迎会 海江田万里前衆議院議員ら来賓が団員と懇談（東京都）
7月1日 学習院大学访问交流（東京都）	7月1日 在欢迎会上与前众议院议员海江田万里先生等来宾畅谈的团员们（東京都）
	
7月1日 歓迎会で学習院大学生と交流（東京都）	7月2日 浅草見学（東京都）
7月1日 在欢迎会上与学习院大学生交流（東京都）	7月2日 参观浅草（東京都）

	
7月2日 入道崎見学（秋田県）	7月2日 日本文化体験（なまはげ太鼓鑑賞）（秋田県）
7月2日 参观入道崎（秋田县）	7月2日 体验日本文化（观赏生剥鬼节大鼓表演）（秋田县）
	
7月2日 日本文化体験（石焼鍋）（秋田県）	7月3日 秋田県庁による「民俗文化・芸能・観光」に関する講義（秋田県）
7月2日 体验日本文化（品尝石烧锅）（秋田县）	7月3日 秋田县政府作关于「民俗文化・大众娱乐・观光」的讲座（秋田县）
	
7月3日 秋田県庁による「民俗文化・芸能・観光」に関する講義（秋田県）	7月3日 千秋公園見学（秋田県）
7月3日 秋田县政府作关于「民俗文化・大众娱乐・观光」的讲座（秋田县）	7月3日 参观千秋公园（秋田县）

	
7月3日 秋田大学訪問・交流（秋田県）	7月3日 秋田大学訪問・交流（秋田県）
7月3日 秋田大学訪問交流（秋田県）	7月3日 秋田大学訪問交流（秋田県）
	
7月4日 秋田県仙北市ホームビジット（秋田県）	7月4日 秋田県仙北市ホームビジット（秋田県）
7月4日 在秋田県仙北市家庭訪問（秋田県）	7月4日 在秋田県仙北市家庭訪問（秋田県）
	
7月5日 田沢湖見学（秋田県）	7月5日 角館武家屋敷見学（秋田県）
7月5日 参观田泽湖（秋田県）	7月5日 参观角馆武士住宅（秋田県）

	
7月6日 国会議事堂視察（東京都）	7月6日 有明清掃工場視察（東京都）
7月6日 考察国会议事堂（東京都）	7月6日 考察有明清掃工場（東京都）
	
7月6日 歓送報告会 王占起団長による訪日活動総括（東京都）	7月6日 歓送報告会 訪日成果報告（東京都）
7月6日 王占起団長在欢送报告会上进行访日活动总结（東京都）	7月6日 在欢送报告会上汇报访日成果（東京都）

4 参加者の感想（抜粋）

○ 今回この訪日プログラムに参加できたことを非常に嬉しく思っている。1人の日本語学習者として、書物やメディアを通してのみ日本語を学ぶのではなく、一度自分で直接本当の日本を体験してみたいと思っていたからだ。私にとって今回の訪問は大変意義深い旅となった。

訪日期间中、浅草寺、入道崎、千秋公園、田沢湖、国会議事堂、有明清掃工場などを訪れたほか、初めて日本の温泉を体験し、日本の文化、自然、交通の様子についてもより深く知ることができた。仙北市でのホームビジットでは、日本の一般家庭の生活も経験し、“流し素麺”を味わったりもした。日本の人々の親切さや温かさ、そしてその暮らしの一端に触れると同時に、こちらでも受け入れてくれたお家の方に中国や私たち内蒙古自治区の様子について話した。学習院大学や秋田大学での学生同士の交流では、日本の大学生のキャンパスライフやその環境を知っただけでなく、中国と日本の教育の違いについてより認識を深めた。また全行程を通じ、中日双方のスタッフの方々が私たち学生に対し極めて細やかなお世話をして下さり、時間の許す限り最大限のプログラムを組んでくれた。こうした仕事に対する真面目で責任感ある姿勢に大いに感服させられた。

帰国後は、私の見たこと感じたことを近い人たちに伝え、みんなにも日本についてより深く知ってもらいたい。同時にもっとたくさんの日本人にも普通の中国人の暮らしを肌身で感じてもらい、双方の理解が深まることを願っている。こうした形での訪問の機会はとても貴重だ。できれば同様なプログラムを数多く実施し、一般人同士の相互理解のための「場」を作ってもらえればと思う。この度の訪日を通じ、私は自分の将来に向けて新たなビジョンを持つに至った。これからは今まで以上に努力し、しっかりとやっていきたい。

○ 8日間の交流活動は短くとも充実していた。日本を再認識しただけでなく、日本への理解も深まりとても勉強になった。内容も政治・経済・文化など多岐にわたり、日本側スタッフには本当に感謝している。

2度にわたるグループ討論を伴う学習プログラムでは、日本の大学の勉強の様子や雰囲気を存分に味わうことができたばかりでなく、日本の若い人たちと交流を深め、友情を結ぶことができた。またホームビジットでは実に多くのことを学んだ。日本の農家の暮らしの豊かさと魅力、そして農家の皆さんの文化度の高さに触れ、得るところが多かった。とりわけお世話になった農家のおじさんが、30分以上もの夜道を運転し、わざわざお土産を届けてくれた時は本当に感激した。こうした人となりの素晴らしさ、ありがたさに深く心打たれると同時に、自らの未熟さを思い、恥じ入るばかりだった。

このことに限らず、至る所で交わされる心のこもった挨拶、別れ際に姿が見えなくなるまで手を振って見送る礼儀など、どれもが私の心を震わせる。これもまた人格の表れであり、修養のなせる業であろう。私は尊敬と感謝の念を胸に、中国の人々に日本人のこの善意について伝えたいと思う。この一般的教養に学んでほしいと思う。また日本の経済の発展ぶりやきれいで清潔な街並み、美しい自然の景観などについても周りの人に話して聞かせたい。そうしてもっと多くの人が日本を旅し、その美しい景色や文化に触れることを願っている。

○ この8日間で最も私の心に残っているのはホームビジットの日のことだ。その日私たちは朝早く仙北市内のとある駐車場に着き、ほどなくするとホストファミリーが車で私たちのグループ5人を迎えに来てくれた。初めて顔を合わせた時は胸がドキドキしてちょっぴり不安だったが、車中でホストファミリーの紹介や優しい心遣いに触れるうち、少しずつ緊張がほぐれてきた。家に着くと、おじさんが私たちを含む家族全員の写真を撮ってくれた。その時はまさか私たちがご飯を食べている間にこれをわざわざプリントしに行ってくれるなど思いもよらず、とても感激した。私たち5人はおばさんと家でお昼ご飯の支度をしたのだが、頑張ってお手伝いしたら、おばさんはキラキラした笑顔を返してくれた。

そして遂に、みんなの力でたくさんのごちそうがテーブルに並んだ。おしゃべりしながら食事を楽しんだ後、今度は片づけにいそしんだ。おばさんも喜んでくれた。それからみんなで仙北市内にドライブに出かけた時には、私の気持ちはすっかりリラックスしていた。でも時の過ぎるのは早い。あっという間に午後のお別れの時間となり、おばさんは涙をこぼした。私たちも泣きながら体をいたわるようにと言葉を掛け合い、再会を願った。

帰国後皆に伝えたいのは、たくさん触れ合うことで初めて互いの隔たりが取り除け、新しい見方が生まれるのだということ。それぞれの国には素晴らしいものがたくさんある。だがそれをす

べて自国に取り入れようとする必要はない。少なくとも相手の国を認め合い、尊重し合うことが大切だ。

○ 私は日本について、一般的教養が高く社会秩序がよく保たれ、経済の発達した国、という程度のことしか知らなかった。今回日本に来てみて、その背景には一人ひとりの自覚と、国民一丸となった努力があったのだということをひしひし感じた。私は日本人の、まずは自分のことは自分でやり、極力人に迷惑をかけない、という生活や行動原則をととても尊敬する。自分もそうあるためにしっかり努力していきたいと思う。

学習院大学と秋田大学では、大学側そして大学生たちの熱意と友情を感じた。彼女たちは本気で私たちと交流しようとしてくれたし、真面目にそして懸命に中国語を勉強していた。その姿に、自分ももっと頑張って日本語の勉強に励まなければ、という思いを強くした。『異文化の視点から見る日本人のコミュニケーション』というセミナーでは、日本に対する“ステレオタイプ”な見方についてより認識を深めることができたように思う。自分たちとは異なる文化を理解し尊重する、その大切さを知り、両立していくこと、それこそが今を生きる若者たちに求められる資質ではないだろうか。

○ 今回の訪日は自分にとって大いに勉強になった。飛行機に乗った瞬間からもう日本人のサービス精神に心打たれ、“スマイルサービス”の笑顔に疲れも吹き飛んだ。また8日間にわたる日本側スタッフの随行はそれ以上に温かいものだった。その細やかな気遣いはまるで肉親のようであった。日本の伝統文化や和食、温泉体験、日本の大学生との交流、ホームビジット、どれもが美しく温かな思い出となって私の記憶に残っている。

また、今回の訪日で最も印象深かったのは、日本人のごみ処理に向き合う姿勢と分別処理技術についてである。ホームビジットの際、私はホストファミリーのおばさんと一緒に食卓の片づけをし、実際にごみの仕分けを体験したのだが、日本人の真面目で真摯な取り組みを肌で感じた。更に7月6日午後のごみ処理場見学を通じ、日本のごみ処理面での卓越した技術とそのための努力を目の当たりにした。

帰国後、私は周りの同級生や家族友人たちに日本で体験したこと全てを話して聞かせたいと思う。中でも一番強調したいのは、やはりごみ処理技術のことだ。中国の若い人たちもごみの分別についてしっかり学び、自国の環境保全に少しでも力を尽くしてほしい。そしてそう遠くない将来、中国の街並みも日本のようにきれいで清潔なものになってほしい。

○ この度の訪問で日本についてとても印象深かったことがある。まず、日本人は雨の日でもきちんと並んで電車を待ち、ホームで押し合うこともない。だが日本人は電車を待つ時にだけ並ぶわけではない。それは生活の中の日常であり、レジで会計を済ませるのに並び、エスカレーターに乗るのに並ぶ。エスカレーターといえば、東京では普通左側に寄って立ち、2人横並びで立つことはない。急ぐ人のために右側を空けておく習慣なのだ。日本に来る前、私は北京で同じような光景を目にしたことはあったが、中国全土にはまだ行き渡っていない。

日本のトイレのことは、日本語の学習経験の有る無しにかかわらず、日本について語る時誰もがそのきれいさを褒め称える。日本ではどこのトイレであろうと皆清潔で、トイレトペーパー

もたっぷり備えられている。これまでバッグには必ずティッシュを入れて持ち歩かねばならなかったのに、日本ではどこもきちんと紙があるのでまずその必要はない。これは実にすごいことだと思う。バスで通訳の方が言っていたが、日本人はなるべく人に迷惑をかけないようにする、という国民性なのだそう。だからだろう、トイレを使った時も、食事をした時も、ホテルに泊まった時も日本人は最後に必ずちゃんと元通りにする。だからトイレだっていつもあんなにきれいなのだ。

もうひとつ感慨深かったことがある。それは東京のような大都市であれ、仙北市のような地方都市であれ、たとえ農村であっても目にしたのはひたすらきれいな道路ばかりだったことだ。道端にごみ袋が投げ捨ててあるところなど見たことがない。ホームビジットで伺った農家のお母さんにこのことを尋ねたところ、ごみはむやみに捨てるのではなく、きちんと分別して出す決まりがもうすっかり浸透している、とのことだった。中国では時として道路にごみが捨ててあることがあるが、そんなことはとうてい理解できないのだそう。

今回の日本訪問では他にもまだまだたくさん思うところがあった。私は自分の見たこと思ったこと学んだことを必ず周りの人たちに伝えようと思う。中日友好協会がこのような機会を与えて下さったことに感謝する。これまで以上にしっかりと勉強し、中日友好の懸け橋として微力を尽くしたい。

○ プログラムに参加するまで、日本について聞いたり触れたりするのは、日本のアニメやドラマ、本や新聞、あるいは中国国内メディアや世論の報道、そして人々の口コミを通してのものくらいだった。だから、経済や科学技術が発達していて人々の環境意識や一般的教養が高いこと、生活リズムが速いこと、食事があっさりしていることなど、日本に対してはただ漠然としたイメージしか持てずにいた。しかし、まさに「百聞は一見に如かず」で、わずか8日間とはいえ肌身を通した体験で、ほんの些細なことにも文化の違いを発見し、学び合う必要を感じた。とりわけ秋田でのプログラムでは、若い人たちの伝統芸能に対する情熱と献身、ホームビジットでのおじいちゃん、おばあちゃんの親切とまごころ、礼儀や細やかな心遣いに触れ、日常生活の端々にも濃密な芸術的息吹が満ち満ちているのを感じたし、都市と田舎の違いさえ、ここではある種の美ですらあると思った。

今回の日本訪問では、皇族方の学び舎として知られる学習院大学と秋田大学で訪問交流を行った。とりわけ学習院での異文化の違いに関する模擬授業は、とても生き生きと且つ興味深く、私たちに異文化交流の大切さを教えてくれた。日本語を学ぶ者として、言葉を学ぶ以上は初心を忘れず、まずは母国語能力の向上を図りつつ、日本語の力をつけていきたい。今回肌身で感じた本当の日本は、これまでの誤った見方を正すものであった。今はこのすがすがしい気分、また謙虚さと受容を胸に、これからも日本語そして日本文化を学び続け、更なる高みを目指していきたいと思う。今回、日本の若い人たちと直接向き合い交流する機会があったこと、今後も連絡を取り合うためのアドレス交換などできたことも、私にとって大きな収穫であった。

○ 最も心に残っているのは、仙北市でのホームビジットと日本側スタッフの素晴らしい受け入れについてだ。仙北市では、ホストファミリーのおじいちゃん、おばあちゃんととても楽しく気持ちのいい一日を過ごすことができた。おばあちゃんはとても優しく穏やかな方で、私たちに自

らしたための書を見せて下さった。長年の修養とそこににじみ出る深みを感じられる文字であった。その後一緒にソラマメをむき、畑から採ってきたばかりのキュウリを食べ、おむすびを握り、ソラマメ炒めとお味噌汁を作った。またおじいちゃんには小さなサプライズのお土産も用意しておいた。おじいちゃんが田んぼから戻って来るのを待ってみんなでお昼にした。ごはんを食べ終わるとお茶を飲みながらおばあちゃんとおしゃべりを楽しんだ。日本の今の社会、国民の心配事、少子化などの問題について語り合い、中国の今の状況などもおばあちゃんに話してあげた。その後畦道を散歩しながら畑に植えてあるおいしい果物を食べたり、家でおばあちゃんに書道の手ほどきを受けたりした。とても大切な素晴らしい思い出だ。おじいちゃん、おばあちゃんと交わした小さな約束、小さな喜びも美しい記憶として心に残っている。

私自身としては今回の日程を大変気に入っている。限りある時間の中で最大限おいしいものを食べ、数々の日本文化を体験することができた。全てはこの素晴らしい行程手配によるものである。

帰国したら周りの人に今回の日本での体験と感想について話そうと思う。私が見た美しい日本のこと、親切で温かい日本人のことをみんなに教えてあげたい。そしてまた日本に来て、もっとたくさんの日本人と触れあい、もっと多くの日本人と友達になり、もっとさまざまな日本文化を体験してみたい。できれば日本での留学や交流など、もう少し長く滞在することで、この国の社会や文化の様々なことについて知りたいと思っている。

○ この度の日本訪問は極めて印象深いものだった。教科書にはない知識をたくさん得ることができたし、教科書に載っている難しくてわかりにくい事柄も実践を通じて手に取るように分かった。いわゆる「百聞は一見に如かず」である。この身で体験し、肌に触れたナマの日本の姿によってこの国への理解は増した。更により深く日本人の目線でこの国独特の風土風習を体感し、それに触れ、感じ取ることで、頭の中だけの無味乾燥な言語表現と文字描写に刺激が与えられたのだ。平面的だった日本が立体的になり、息を吹き込まれたような気がする。

帰国後、私が家族に最も話して聞かせたいのはホームビジットのことだ。なぜなら私自身が田舎生まれの田舎育ちであり、村から街へ、そして海外へと、とりまく環境が順次移り変わっていく様子をまざまざと実感したからである。秋田の田んぼや畑、農家のたたずまい、山や溪谷、農家の暮らし、そのどれもが私に故郷を思い出させた。故郷の我が家、故郷での生活を思い起こし、本当に感慨深かった。国は違っても田舎は中国も日本もそう変わらない。人々は純朴で優しく、そして温かい。ただ違うのはここでは全てがこんなにもよく保存され守られているという点だ。とりわけ古い建築物や文化財などだ。私たちの国では経済の発展、工業的需要から農村をとりまく環境は次第に変化し、市街化が進んだ結果、かつてのような田舎の原風景はもう失われてしまった。禍福の行方はわからないが、今後の永続的な発展に不利なことだけは確かだ。特に今中国ではお年寄り達、ひいては中年層までもがある種の病に罹りやすくなっている。“三高（高血圧・高血糖・高脂血症）”や“痴呆症”などだ。これは環境破壊や大気汚染とたぶん無関係ではあるまい。青い山や清らかな水を守り続けている日本が羨ましい。日本人の長寿の源はここにあるのではないと思う。

今後はもっとしっかり日本語を学び、日本のことを理解したい。中国に貢献できるよう、日本の進んだ部分や生態系の維持管理について学ぶと同時に、人として一般的教養や人格に磨きをか

け“上等な”人間になりたいと思う。

○ この度の訪日は大変勉強になり、また色々思うところも多かった。

一、最も印象的だったのは、まず日本のきれいで清潔な街並みと緑の多さ、澄み切った空気、そして社会秩序の安定だ。何もかもが整然と秩序立っている様子に、思わずここに定住したくなる衝動すら覚えた。

二、日本でこんなにしっかり伝統文化が守られ続けているのは、国や自治体だけでなく、一人ひとりが自覚し、意識的にこれを受け継ぎ、大切に、盛り立てようとしているからである。こうした文化に対する認識の高さについて、中国人も再考し見習うべきではないだろうか。

三、日本製品の品質の良さ。まず褒め称えるべきは、日本人の生真面目さ、怠りのなさ、細やかさといった仕事に対する真摯な姿勢である。

四、日本の人々の素朴で善良な人となり。とりわけ秋田を訪れた際、農家の方々の優しさとまごころにひどく心打たれた。また年長者の年少者に対する深い愛情が肌身で感じられた。民間の友好交流とはこうした点にこそ意義があるのではないか。互いの国の人々が深く慕い合ってこそ、両国の友好関係は永く保たれていくものだと思う。

○ このプログラムに参加するまで、日本人に対する印象は正直さほど良いものではなかった。例えば、やけに真面目すぎるところや時間にうるさすぎるところなどである。実は日本人は中国人に余り親切ではないのではないかと思っていた。ところが、日本人と直接触れ合ってからというもの、真面目さや時間への厳しさは彼らの長所であることがわかったし、中国人に対して、とりわけ普通の人々はことのほか親切だった。日本という国は、清潔で上品で想像以上に国民レベルの高い、なかなかの国なのだと感じた。

私自身日本語を専攻する学生なので、今回の訪問は大変勉強になった。例えば国会の所在地など、些細な知識ではあるが、自分がこれまで本で習ったことを実際に目にすることで、印象がより鮮明になった。また何より重要なのは、自分の会話力が鍛えられたということ、生粋の日本語の表現や慣用句を数多く学べたということだ。また仙北市ホームビジットでは、日本の人々の熱いほどの親切さに触れられたし、秋田では更に伝統芸能“なまはげ”も楽しむことができた。

○ 最も心に残っているのは、仙北市でのホームビジットとそのホストファミリーとのなごり惜しい別れの場面である。訪れたお宅は想像していた通りだった。お年寄りはとても優しく慈愛に満ちていて、幸せそうな家族、美しい小さなお庭、可愛い子犬、そして日々田畑に出掛けては自ら植えた作物を見回り、その安全な野菜を口にする。その時の満面に広がる満足気な様子がとても印象的だった。またおしゃべりをしていた時、おばあちゃんが言った「若い時は後で後悔しないよう、やりたいと思ったことは何でもやってごらん」との言葉が胸に響いて忘れられない。おばあちゃんの穏やかで幸せな暮らしがいつまでも続くことを願ってやまない。

帰国後、周りの人たちに伝えたいことは、日本人の危機意識についてである。この強烈な危機感が日本の絶え間ない進歩と発展の原動力となっている。翻ってわが国では極めて豊富な資源を有しながらそれを惜しむことを知らない。なんと悲しいことか！また、日本におけるサービス業は、いつでも不言実行、且つ熱心にそして真面目に一つひとつ細部に至るまで気を配る、真の意

味での「人民に奉仕する」だった。日本では福祉もとても行き届いている。たとえば、老人に対する数々の補助制度や障害を持つ人向けの各種施設設備など、とても人にやさしいと感じた。

帰ったら大学の友人たちに言いたい。機会があれば外へ出て別の世界も見てみるべきだ、と。直接自分の目にした事が往々にして大きな何かをもたらすものだ。そして言葉を学ぶと決めたのなら、しっかりと努力することだ。また言葉を身に付けてようやく日本人とちゃんと交流できるのだとも感じた。そうでなければ構文が難しいとか単語力が乏しいなどといった理由で、おしゃべりの話題すら見つけることができない。自分の中に本当の力が備わっていれば、どこにでもその力を振るう場はあるものだ。私はみんなにも日本留学を勧めたい。勉強しながらアルバイトをする、そうすることで学んだことが実際に役立つし、より早いうちに、またよりうまく社会に溶け込める気がするからだ。まずは私自身から始めようと思う。

○ 言いたいことがたくさんあり過ぎて少し複雑な気分だ。まず、周知の理由からわが国の一部の人たちの間には日本に対する偏見がある。私は日本語を学んでいるため、普段でも週末もしょっちゅう日本人と接触があり、ある程度日本人のことはわかっているつもりだ。そして今回の訪日でその理解がますます深まったのを感じている。一番心に残っているのは、やはり秋田県仙北市でのホームビジットの日のことだ。はじめは緊張したが、ホストファミリーの奥さんがとても親切に私たちをリラックスさせようとして下さった。家に着くと、おじいちゃんとおばあちゃんもいらっしやった。おじいちゃんは少し照れ屋のようで、私たちが笑いながら写真を撮っている時も、ひとり別の部屋でネットニュースを読んでおられた。おばあちゃんは口数こそ少ないものの、とても優しい方だった。はっきり覚えているのは、おばあちゃんが新しい浴衣を用意してくれ、それを私たちに着せて下さった時のことだ。たぶん疲れからだろう、私はおばあちゃんの荒い息づかいを耳にした。その時何だかとても感動し、日本人の人に対する思いやりの深さを実感したのだった。その日は一日本当に楽しかった。お別れの時、おばあちゃんと私の友だちが抱き合い、涙をこぼした。その時のおばあちゃんの手の中を涙をぬぐうしぐさに、私の胸にも甘酸っぱいものがこみ上げ、みんな耐え切れずに泣いた。人と人との関係はなんとシンプルなものなのだろう。わずか一日足らずの触れ合いだったが、みんな思いのたけを込めてこの時を過ごした。帰路、私はたくさんのことを考えた・・・。

帰国したら特に周りの人たちに伝えたいことは、日本の人々の“人情味”についてである。ホテルの従業員の気配りや心遣いも賞賛に値するものだった。ものごとは客観的に見る必要があるが、人に伝えるべきは前向きな“プラスエネルギー”でなければならないと思う。

○ 日本。この神秘の王国、そして限りない親しみと生命力にあふれた国。

最も印象に残っているのはその礼儀の文化である。慌ただしい大都会であれ、静かでのんびりした秋田であれ、いつも親切に私たちを助けてくれる人がいた、出迎えてくれる笑顔があった。その度私の胸はわき起こる敬意の気持ちでいっぱいになるのだ。思えば、どのホテル・旅館でもそこを発つ際、従業員の方たちが入り口に並んで見送って下さった。これこそ人情味あふれる日本の心そのものではないだろうか。

農村で農家の暮らしを体験したことは生涯忘れられない思い出だ。田舎の家はどれも古く、私たちがお邪魔した家は実に百年以上を経た家屋だったが、とてもよく手入れされていた。おじい

ちゃん、おばあちゃん、そしてお母さんは、まるで我が子のように私たちに接してくれ、一緒にご飯を作ったり、切り紙をしたり、浴衣を着せてくれたりした。その全てにおいて細かなところまで意が尽くされており、私たちは心からそのまごころに満ちたぬくもりを感じることができた。お別れの時、あんなにお歳を召されたおじいちゃん、おばあちゃんが涙をぬぐっておられるのを見て、私たちも耐え切れずに涙をこぼした。ここに残りたいとどんなに思ったことか。おそらく他のどんな国にも、これほどの思いやりと純朴さにあふれた人たちはいないのではない。

他にも、日本の第一印象としてまずその清潔さがあげられよう。街がきれい、バスがきれい、空気がきれい、そして空もホテルもみなとてもきれいなのだ。来る前から日本の清潔さは耳にしていたが、実際にそれを目の当たりにして、この国の人々の精神に感服せずにはいられない。更に、日本人は国のことに関心が高い。たぶん選挙についても、サッカーのナショナルチームについてもそうなのだろう。たとえそれに対し自分が何もできないとしても、やはり関心を持続けるに違いない。

ただ、一つだけ日本で慣れなかったことがある。食事のことだ。あの匂いを嗅ぐだけで全身耐えられなかった。生まれ育った環境による習慣の違いだと思うが、これこそがつまり異文化ということなのだろう。

○ プログラム参加前に日程を眺め、日本の伝統文化鑑賞・見学とあるのを見て、日本は国も小さいし、伝統文化といってもどうせそんなにたいしたものではないだろうと思っていた。ところが、“なまはげ”太鼓の演奏を見終え、角館を見学して、ようやくわかった。日本は小さな国だが、人々の伝統文化の継承という点において、私たちには形容し難いものがあるのだと。また今回日本に来るまで、日本人は自分の責任を果たすためだけに私たちを招待しているに過ぎないのではと考えていた。しかしプログラム中に見せた日本人の思いやり、熱意と生真面目さ、責任感には本当に感動と敬服の念を覚えずにはいられなかった。

今回私たちは学習院大学と秋田大学を訪問した。学習院では日本の学生や留学生たちと一緒に模擬授業を体験したのだが、授業の雰囲気は活発で、まさに国が異なれば人々の考え方も感じ方も違うのだということを再認識した。日本の学生との交流により、今の自分の学習レベルや成果がまだまだだと言うことも思い知らされた。大学はただ教科書に載っている知識を身に付けるだけの場所でなく、より大切なのは人と交わる中で何かを学び取り、それを応用していくことであろう。秋田大学では図書館を見学した。私は図書館独特のあの雰囲気が好きだ。資料を探すのにネットだけに頼るのではなく、図書館でもより多くのものに出会える。また秋田大学には学生の就職支援を専門とするキャリアセンターがあり、多くの就職情報が収集されていた。こうした施設は中国国内ではまだほとんど目にすることができない。

○ 今回の訪日で、日本に対する理解は大きく変わった。最も日本に特徴的で且つ中国とは違うと感じた点は主に以下の通りである。

まず、東京であれ秋田県であれ、日本人の時間に対する意識の高さは、私が深く感銘を覚え、見習いたいと思った好ましい習慣だ。そのことがまた、都会のあの慌ただしくもリズムカルで引き締まった空気を生み出している。次に日本の伝統文化の継承と発展も私たちが見習うべき点だと感じた。飲食、服装、挨拶、建築など様々な面で如実にそれが表れていた。一方で日本はまた

新しい技術や科学技術への追求にも貪欲だ。この分野で日本は常に独創的でさえある。三つめは、日本という国では数々のデザイン（例えば飛行機の客室内での小さなネジひとつにも隠しボタンが使われていた）がとても人にやさしい設計になっているという点だ。空間の利用がうまく、ホテルでの設備も万全だった。また女性の社会進出を大々的に後押ししているのも大変良いことだと感じた。

いま私は人生の先輩たちが残してくれた「一度国を出れば文化の大切さがわかる」という言葉の意味を実感している。学んでいるのは単に言葉だけではなく、更にその国の文化をも学ばなければならないのだ。中国の今を生きる若者として私は提案したい。大学で懸命に学ぼう。そして身に付けた言語を国際交流、友好往来の懸け橋とし、この地球村をより美しいものにしていこうではないか。

○ 最も印象に残ったのは有明清掃工場の見学だった。中国でも日本のごみ処理のことは耳にしたことがあったが、今回有明清掃工場での見学で日本の処理工程についてより深く知ることができた。

清掃工場では、ごみ処理場における一つひとつの処理手順について、またこの工場が一体どのように管理運営されているのかについて、とてもよく理解できた。そして日本のごみ処理の高効率性とリサイクル、処理残渣による環境負荷の極限までの低減化等に驚きと衝撃を覚えた。だが同時に、その背景にも思いを馳せずにはいられなかった。かつて日本のごみ処理も現在のように高効率でもなければ徹底したものでもなかった。しかし国や自治体の強力な後押しと援助、そして一般市民のごみの分別やリサイクル等に対する意識の高まりと浸透が、今のような合理的で優れた処理モデルを造り上げたのだ。

しかし、中国のごみ処理はまだ日本に及ばない。これは政府機関だけの問題ではなく、それ以上に市民一人ひとりから始めねばならないことだ。私は、日本の人々のこうした深く心に根差したごみへの意識を、自分の周りにも伝えていく必要があると感じている。もとより中国は人口大国なので、政府だけに頼って何かを成し遂げることなどとうてい不可能だ。一般庶民の支持と理解、浸透がごみ処理の高効率化には欠かせない推進力となる。それゆえ中国の市民にも日本人のようにごみが処理されていく詳しい過程に関心を持ち、理解してもらう必要が大いにあると思っている。

○ この訪日で、日本への理解と経験は随分と深まった。教科書で先生が話していた日本の街並みやごみ分別についての知識もこの目で確かめることができたし、都市の繁栄振りと先進的な科学技術にも触れることができた。しかし、それ以上に私の心に残っているのは、フレンドリーな日本の人々のことである。私たちを受け入れてくれた日本側スタッフは、細かなところまで心を砕き温かく寄り添ってくれた。そのあまりの素晴らしさに感動を覚えずにはいられなかったが、私たちがホームビジットした秋田県のお宅もまた、それ以上に優しく友好的だった。わずか一日だけの触れ合いだったが、私たちは本当に睦まじくたくさんのかたを語り合い、日本人に対する思いが一層深まるのを感じた。将来きつとまた日本を再訪したいと強く思う。これからもずっと連絡を取り合い、友人家族のようにお付き合いしていきたいと願っている。